

日本語母語話者が聴き取りを 苦手とする英語の母音の指導

Teaching English Vowels that Japanese Native Speakers are not Good at Catching

坂本 純一

SAKAMOTO Junichi

要 約

本稿の目的は、英語の教師を目指している日本語母語話者の学生が知っておくべき、日本語母語話者が聴き取りを苦手とする英語の母音について理解を深め、中学生や高校生への指導の方法を考える一助とすることである。ここではすべての母音を網羅的に取り上げるのではなく、一般的な発音教本の類ではあまり取り上げられていないにも関わらず非常に重要である事象に焦点を当てる。

私たち英語の学習者にとって、母音の音素に含まれている異音にはかなりの幅があり、例えば英語の音素 /e/ は日本語の /エ/ のように聞こえる発音をする英語母語話者と /ア/ のように聞こえる英語母語話者がいる。日本語母語話者にとって前者の話す /e/ の聴き取りは容易であるが、後者の話す /e/ の聴き取りは困難を伴う。ここでは、このように聴き取りに困難を伴う英語の母音をいくつか取り上げ、それらの母音を含む単語を日本語母語話者の大学生に書き取らせた。その結果、正しく書き取った学生とそうではない学生にはっきりと分かれた。

このように聴き取りに困難を伴う英語の母音があることを知っておくことは、聴き取りを少しでも成功に近付けることに寄与するのであり、英語の教師はこのことを授業の中で意図的に生徒に紹介し、実際に基づいて慣れさせていくことが大切である。

1. 日本語母語話者が英語の母音の聴き 取りを苦手とする理由

日本語母語話者が英語を聴いたときにその意味を理解できない原因には様々なものがある。それは音素レベル、単語レベル、アクセントレベル、プロソディーレベル、語法レベル、文法レベル、文レベル、ディスコースレベル、背景知識レベル、聴覚障害レベルなどで起こる。本稿で論じるのは音素レベルであり、特に母音の音素の聴き分けに失敗する要因に焦点を当てるものである。

音声言語の生成→伝搬→理解のプロセスには次の

5段階が考えられる。

- ① 話し手の脳神経
- ② 話し手の発音器官
- ③ 空気中の音波の伝搬
- ④ 聴き手の鼓膜が受容する音波
- ⑤ 聴き手の脳神経による音波の解析

英語音声学では、主として②のプロセスを調音音声学、③のプロセスを音響音声学、④と⑤のプロセスを聴覚音声学が研究の対象としている。

このプロセスの随所に母音の音素の聴き分けに失敗する要因が潜んでいる。

まず、これは話し手の側に原因がある場合であるが、話し手は自分が発してる母音が相手に意図した

音素として伝わるように、発した音を自分の耳でモニターしている。だから自分がアと言うつもりでうっかりエと言ってしまったことに気が付けば直ちにアと言い直すのである。しかし、このモニターがうまく作用しないときがあり、相手には自分が意図しない母音として伝わったままになり、相手が誤解するといったことが起こる。

次に空気中を音波が伝わる時に起きる問題である。話し手の口から空気中に発せられた音波はその波形のまま聴き手の鼓膜に伝わるとは限らない。これは話し手と聴き手の距離が離れるほど、あるいは周囲の騒音が大きいほど起きることである。話し手と聴き手の距離が離れた場合には、空気の伝搬経路の近くに特定の周波数を吸収する素材があると波形は変わってしまう。騒音の場合も、騒音に含まれる周波数との差し引きが起これ、母音の波形が影響を受けることになる。また録音・再生された音波を聴く場合にも、マイクロフォンや記録回路やスピーカーの特性によって母音の波形に影響が及ぶ。

最後に聴き手の側の原因である。鼓膜に入ってきた音波を脳が解析し、アと認識したりエと認識したりするのであるが、アなのかエなのか脳が迷ったときに暫定的にいずれかに決め、つじつまが合わなければもう一方に決めるといったことを瞬時に行っている。このことは母語話者から母語話者への伝達であれば概ねスムーズにいくが、英語母語話者から日本語母語話者への伝達になると、別の大きなハードルがあるのである。本稿ではこのハードルについて詳しく見ていくことにする。

これは、日本語と英語の「音素」に含まれている「音声」の違いというハードルである。(ここで言う「音声」とは無限にある個々の物理的な音のことであり、「音素」とは「音声」を意味の区別に関わるか関わらないかという観点からとらえたものである。日本語で言えば、/ア/という音素には/ア/という音色に聞こえる音を生成するための周波数の組み合わせが幾通りもあり、それらは別個の「音

声」(音声学では「異音」と言う。)として数えられるが、「音素」としては一つと数えることになる。なお、本稿では日本語の母音の音素を/ア/のようにスラッシュで片仮名をくくって表記する。)

手始めに、英語の音素の/e/を取り上げる。(/ /は音素を表す記号である。)これを日本語の/エ/に近く発音する英語母語話者の発音は日本語母語話者にとっても聴き取りやすく問題が生じないが、しばしば日本語母語話者には/ア/のように聞こえる音声で発音する英語母語話者がおり、聞き間違いの原因になるのである。/エ/が表す音声の範囲(異音の集合体)よりも/e/が表す音声の範囲の方が広く、/e/という音素は日本人には/エ/に聞こえる音声から/ア/に聞こえる音声までを含んでいるのである。この/e/については今述べたような事実があり、英語の学習者であればある時点でこのことに気が付くものであるにも関わらず、英語の発音練習をさせる教材でそのことを指摘しているものをほとんど見かけないのは不可解なことである。

更に複雑なことに、そのような発音をする英語母語話者の/e/を日本語母語話者が聴くとき、それが日本語の/ア/に近いという仮説の下に聴くと/ア/に聞こえ、/エ/に近いという仮説の下に聴くと/エ/に聞こえるということが起こるのである。これは、実際にはsendという単語が読まれているのだが、たまたま話題が砂(sand)の種類の話の中に出てきたりすると、sandと聞き間違えるような場合である。

聴き取りを成功させるためには、/ア/と聞こえたけれども前後関係から考えてつじつまが合わないので/エ/なのではないかと修正させるとか、生徒への指導の際には、英語を聴く時の心構えとして、/ア/のように聞こえてもそれは英語の/e/の範囲に含まれるのだということに実際の音声を聴かせながら慣れさせることなどが必要になるのである。

英語母語話者にとっては初めから/e/であるこ

とが自明の音に日本語母語話者が迷うことについては、学習指導要領には触れられていない。しかし、この問題は英語の聴き取りをするのに避けては通れない基本的な事項であるため、もっと意図的に授業の中で指導することが必要なのである。現在急速に普及している電子辞書に吹き込まれているモデル発音を聴き比べても、/e/を/ア/のように聞こえる音声で発音している電子辞書と/エ/のように聞こえる音声で発音している電子辞書が見られるのである。

ここで、一層問題を複雑にしている要因を指摘するならば、そもそも日本語母語話者同士の会話ですら、話し手は/ア/と言ったつもりでも聴き手は/オ/と聴き取ってしまうことが現実に起きることがある。これは方言の違いといったことに限らず、一緒に住んでいる家族同士の会話でも起きることがある。これは話し手にとっての/ア/という音素の認識がこの聴き手にとっての/オ/という音素の認識と集合的に重なっている部分があることを暗示している。日本語母語話者同士でさえ/ア/という「音素」に含まれる様々な「音声」は一致していないため、ある母音を単独で発音したときに、話し手の意図しない母音として聴き取られることになる。

それでは、そのようにあいまいな性質をもった母音を用いているにもかかわらず、日本語母語話者同士の会話が概ね成立している理由は「文脈」を手掛かりとしていることである。文脈を手掛かりとして、実際に聞こえた「音声」がどの「音素」に属しているのかを分類し、つじつまが合わなければ別の音素に分類し直すという作業を瞬時に行っている。

また、この高度な作業においては、実際に物理的音声として空气中を伝搬しているのが「アンセイ」であり、聴き手の耳の鼓膜にも「アンセイ」という波形が入力されたとしても、鼓膜から脳神経に伝わり、脳神経がそれを文脈の中でつじつまの合う「オンセイ」に修正して「オンセイ」として聴き取ったつもりになるということも起こる。つまり、脳の認

識段階においては初めから「アンセイ」ではなく「オンセイ」と聞こえているということである。これは、我々は会話の流れの中で次に「話されるかもしれない単語」あるいは「話されないであろう単語」を予測しながら聴いているので、文脈上「アンセイ」が、「話されないであろう単語」に入っているならば、「話されるかもしれない単語」に含まれる「オンセイ」を聴いたつもりになるということである。

昨今 AI の進化により、自動翻訳ソフトが各種開発されているが、試みにあるソフトに向かっていくつかの英語の単語を話しかけてみる。例えば、前述の send と sand を発音してみると、母音の部分で日本語の/エ/と/ア/にして発音すると send と認識され、sand の方は相当気を付けながら/æ/の音を出さないと sand と認識されなかった。しかし、文の中に sand 入れて読むと、それほど気を付けて/æ/の音を出さなくても sand と認識された。このように AI においてもその文脈（文法的な要素も含めて）において当てはまるであろう（当てはまらないであろう）単語を確率・統計的に選り分けて認識している。

それでは、send の母音を/エ/のように発音する英語母語話者と/ア/のように発音する英語母語話者がいるということを知らなくても文脈によって send であることが必ず分かるかということ、そういうわけにもいかないのである。/エ/だと思っている単語が/ア/と聞こえた時に、それを文脈によって理解するのは、文脈によっては容易な場合もあるが、そうではない場合もある。やはり、英語の音素/e/は、日本語母語話者には/エ/に聞こえる発音をする英語母語話者や/ア/と聞こえる発音をする英語母語話者がいるということを含め、後述するようないくつかの事例があることは、あらかじめ知っておく方が英語の聴き取りが成功する確率が高まるであろうし、英語の教師として生徒に指導するとき、生徒に混乱を与えないように十分気を付けなが

ら、知識として与えていくことに意味があると考えらる。

音素に含まれている周波数の粗密を画像化（縦軸を周波数、横軸を経過時間とする）し、音素ごとの周波数の粗密の共通点を探る試みも行われてきた。周波数というと音程の高い・低いをまず思い浮かべるところであるが、例えばピアノの真ん中のドの音の高さでアー、イー、ウー、エー、オーと歌ったときに、その波形を調べてみると、いくつかの周波数の波形が合わさって複雑な形の複合波となり、その複合波が1秒あたり約262回繰り返されている。そしてこの周波数の組み合わせでアやイに聞こえる音になることが知られている。しかしこの組み合わせも話し手の年齢、性別その他の要因によってかなり変動するため完璧な規則性を見出すことは容易ではない。

このことは、物理的音響のどの部分を脳がとらえて／ア／として認識するのかが人それぞれである可能性があることも示唆している。同一の人物を二人の人が見たときに、その人物の顔のどの部分に目を付けてその人物であることを特定するのは人によって異なる。これと同様のことが音素の識別にも当てはまる可能性があるということである。

また、同一の物理的音響を聴いても、それを／ア／と認識する人と／エ／と認識する人の違いが出てくるのは、その音響を構成している要素の内のどの要素を組み合わせで判断しているかの違いである可能性もあるし、また、その組み合わせ方が同じである日本語母語話者が二人いたとして、一人は／ア／と認識してもう一人は／エ／と認識する場合は、二人が幼少期に育った環境によって／ア／と／エ／の境目が異なっている可能性も考えられるなど、大変複雑である。

次に日本語母語話者が英語の単語を聴いたときに、その単語を特定するメカニズムについて考えてみる。ここでは単語のみの聴き取りで、文脈の手掛かりが一切ない場合とする。

単語を特定する手掛かりとするのは、認識した母音と子音である。ここでは本稿のテーマである母音に絞って述べるが、筆者の仮説は、「日本語母語話者の多くは、聞こえた英単語の母音をまず／ア／、／イ／、／ウ／、／エ／、／オ／のいずれかの音素に分類する。次に分類した音素に近い英語の音素を含む単語を候補として挙げる、という順序を無意識のうちに踏んでいる。」というものである。この仮説のとおりであるとすると、例えばsendという単語を聴いて書き取るときに、／e／を／ア／と聴き取ってしまうと、sandやsoundなど別の単語を候補に挙げてしまうことになり、正解のsendが候補に挙がることはなくなってしまうのである。

このことを一切の文脈なしで回避する方法は、繰り返しになるが、英語の／e／という音素は／エ／に聞こえる音声で発音する英語母語話者もいるが／ア／に聞こえる音声で発音する英語母語話者もいるという事実を知識として頭に入れておき、実例を数多く聴いたりそれに近い音を出す練習をしたりして慣れることが大切である。このことを英語の教師は意図的に英語の授業の中で指導していくことが必要である。

2. 聴き取りが難しい母音の例

2.1 /e/ が /ア/ のように聞こえる

例：send これについては上記で詳細に見てきたとおりである。

2.2 /æ/ が /エ/ のように聞こえる

例：land /æ/ という音素についても、日本語母語話者の多くにとって／ア／と聞こえる発音をする英語母語話者と／エ／と聞こえる発音をする英語母語話者がいることを知っておく必要がある。

2.3 つづりの o が /ア/ のように聞こえる

例：hot この事例は他の事例とは少し事情が異なる。hotのつづりのoの部分で、イギリス式発音をする英語母語話者は／オ／と聞こえる発音をする

傾向があり、アメリカ式発音をする英語母語話者は /ア/ 又は /オ/ と聞こえる発音をする傾向がある。発音表記上もイギリス式発音は /ɔ/ でアメリカ式発音は /ɑ/ で表すなどの区別をしている。

ここで問題になるのは、つづりに o が含まれている単語を外来語として片仮名で表記するとき、つづりの o の部分をローマ字式にオで置き換えることが多く、元の英単語がアメリカ式発音の /ɑ/ で発音され、それを /ア/ と認識したときに hut 等の別の単語と間違える原因となることである。

※ hot という単語を中心に考えれば、つづりの o の部分を /ɔ/ と発音しても /ɑ/ と発音しても意味は変わらないことから、/ɔ/ と /ɑ/ は互いに異音であるという解釈もできる。

2.4 /ʌ/ が /オ/ のように聞こえる

例：gulf 特に /ʌl/ のように /ʌ/ に /l/ が続く場合に /ʌ/ が /オ/ のように聞こえる傾向があることを知っておく必要がある。

2.5 /u/ が /オ/ のように聞こえる

例：wolf /u/ については、日本語母語話者の多くにとって /ウ/ と聞こえる発音をする英語母語話者と /オ/ のように聞こえる発音をする英語母語話者がいることを知っておく必要がある。

2.6 /i/ が /エ/ のように聞こえる

例：hit 短い /i/ は日本語の /イ/ と /エ/ の間のような音色をもつ音であり、日本語母語話者には /エ/ のように聞こえることも多い、といった説明をよく見るところであるが、日本語母語話者にもはっきりと /イ/ と聞こえる発音をする英語母語話者も少なくない。筆者の手元にある電子辞書 A では /エ/ のように発音されているが、電子辞書 B でははっきりと /イ/ のように発音されている。試みにある自動翻訳ソフトに向かって /i/ を含む英単語を日本語の /イ/ で発音しても正しく認識される。

3. 「正しく発音できない音は聴き分けられない。」という説の妥当性

この説は次の3通りに言い換えると妥当性が高くなるであろう。

一つ目は「聴き分けるべき音素がどういう音素か知識として分かっていないと聴き分けられない。」ということである。なぜなら知識として分かっているでもそれが発音できるとは限らないからである。正しく発音できなくても聴き分ける能力がある日本語母語話者はいる。

二つ目は「聴き分けるべき音素がどういう音素か知識として分かっているならば、実際に聴き分けられる可能性が高くなる。」ということである。「可能性が高くなる」としているのは、知識として分かっているでも日本語母語話者にはよほど注意しないと聴き分けるのが難しい /dʒ/ と /ʒ/ の対立などがあるからである。

三つ目は「正しく発音できれば、聴き分ける力も向上する。」ということである。正しく発音できるということは、その前提として音素の違いが知識レベルでも備わっているからであり、上記の一つ目と二つ目と同じことである。

以上は、音素を聴き分けることを目標に置いた場合の話であるが、正しく発音することを目標に置いた場合の、聴き分ける力との関係は次のように言うことができる。

一つ目は、「聴き分けられない音素は発音し分けられない。」ということである。なぜならば発音し分けるには自分の発している音を自分の耳でモニターし、意図した音で発音できているか自己判断する必要があるからである。聴き分けられない音素はモニターのしようがないからである。ここで言っている「聴き分けられない」というのは早い発話についていわずに聴き分けられないというのとは別の話である。また、実際には聴き分けていなくても前後

関係からその位置にその音素があるはずである、と
いうように、物理的な音声信号を知覚するのは別
の方法で心理的にその音があるかのように知
覚するのも別話である。

二つ目は「聴き分けられる音素は、練習次第で発
音し分けられるようになる可能性がある。」という
ことである。英語の音素の発音は練習が必要であ
り、聴き分ける能力と比例して自然に上達する要素
も確かにある（例えばプロソディー）が、/dʒ/と
/ʒ/の音の出し方の区別などは意識的に練習しない
と習得できるものではない。

4. 単語の書き取り練習の結果と考察

次に、明海大学の日本語母語話者の学生49名に、
電子辞書（シャープ株式会社製PW-NA1）に収録
されているモデル発音を講義室のスピーカーを通し
て再生し、各単語を5回ずつ聴かせて書き取らせた
結果を記す。（ ）内の数字は人数である。

各単語の結果の後に考察を記すが、人数につい
ては統計処理をして何らかの規則性を見出すほどの数
がないため、あくまでもこの結果に限ったものであ
る。

4.1 /e/を含む単語

4.1.1 lend

4.1.1.1 学生が書き取った単語

4.1.1.1.1 母音の部分を /エ/ と認識した可能性が
ある例

lend(7) lent(3) rend(2) rent(2) レンド(3)
レーンド(1) レント(1)

4.1.1.1.2 母音の部分を /ア/ と認識した可能性が
ある例

land(20) rand(1) ランド(1) learned(1)
round(2) マント(1) マンツ(1)

4.1.1.1.3 その他の例

無答(3)

4.1.1.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /エ/
と認識した者が49人中19人いたが、27人は /ア/
と認識したために lend とはかけ離れた単語を書き
取った可能性を示している。

また、/エ/と認識した19人の中で lend と書き
取ることができた者は7人だけであり、子音も含め
た聴き取りの困難さを窺わせた。

4.1.2 send

4.1.2.1 学生が書き取った単語

4.1.2.1.1 母音の部分を /エ/ と認識した可能性が
ある例

send(14) セント(1)

4.1.2.1.2 母音の部分を /ア/ と認識した可能性が
ある例

sand(16) sound(9) sant(1) sad(2) third
(1) サンド(2)

4.1.2.1.3 その他の例

無答(2)

4.1.2.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /エ/
と認識した者が49人中15人いたが、31人は /ア/
と認識したために send とはかけ離れた単語を書き
取った可能性を示している。

また、/エ/と認識した15人中14人が send と
書き取り、残りの1人も「セント」と書き取って
おり、ほぼ正確に聴き取れていた。/s/と /nd/を聴
き取ることができ、/e/の聴き取りに成功すれば候
補は自ずと send に絞られるためと考えられる。

4.2 /æ/を含む単語

4.2.1 land

4.2.1.1 学生が書き取った単語

4.2.1.1.1 母音の部分を /ア/ と認識した可能性の
ある例

land(5)

4.2.1.1.2 母音の部分を /エ/ と認識した可能性のある例

red(16) lend(10) lent(5) rend(3) bread(1) friend(1) レッド(1) レント(1) レンド(1) レンツ(1) レアント(1) プレンド(1) メンド(1)

4.2.1.1.3 その他の例

無答 (1)

4.2.1.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /ア/ と認識した者が 49 人中 5 人だけいたが、43 人は /エ/ と認識したために land とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

また、/ア/ と認識した 5 人は全員 land と書き取った。/l/ と /nd/ を聞き取ることができ、/æ/ の聞き取りに成功すれば候補は自ずと land に絞られるためと考えられる。

4.2.2 sand

4.2.2.1 学生が書き取った単語

4.2.2.1.1 母音の部分を /ア/ と認識した可能性のある例

sand(2) sad(1)

4.2.2.1.2 母音の部分を /エ/ と認識した可能性のある例

send(15) sent(16) said(1) set(2) センド(5) セント(1) セン(1) シェンド(1)

4.2.2.1.3 その他の例

sea(1) seen(1) seened(1) 無答(1)

4.2.2.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /ア/ と認識した者が 49 人中 3 人だけいたが、42 人は /エ/ と認識したために sand とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

また、/ア/ と認識した 3 人中 2 人は sand と書き取った。/s/ と /nd/ を聞き取ることができ、/æ/ の聞き取りに成功すれば候補は自ずと sand に絞られるためと考えられる。

4.3 /ɑ/ を含む単語

4.3.1 hot

4.3.1.1 学生が書き取った単語

4.3.1.1.1 母音の部分を /オ/ と認識した可能性のある例

hot(13)

4.3.1.1.2 母音の部分を /ア/ と認識した可能性のある例

hat(21) hatt(1) had(1) heart(3) hard(2) hart(1) hert(2) ハット(4)

4.3.1.1.3 その他の例

het(1)

4.3.1.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /オ/ と認識した者が 49 人中 13 人いたが、35 人は /ア/ と認識したために hot とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

また、/オ/ と認識した 13 人全員が hot と書き取った。/h/ と /t/ を聞き取ることができ、/ɑ/ の聞き取りに成功すれば候補は自ずと hot に絞られるためと考えられる。

4.4 /i/ を含む単語

4.4.1 hit

4.4.1.1 学生が書き取った単語

4.4.1.1.1 母音の部分を /イ/ と認識した可能性のある例

hit(17) ヒット(2) ヒッド(1) heat(2)

4.4.1.1.2 母音の部分を /エ/ と認識した可能性のある例

head(5) het(5) hed(9) ヘット(1) ヘッド(1) ヘツツ(1) ヘ(1)

4.4.1.1.3 その他の例

hut(1)

4.4.1.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /イ/ と認識した者が 49 人中 22 人いたが、23 人は /エ/

と認識したために hit とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

また、/イ/と認識した22人中17人が hit と書き取った。/h/と/t/を聞き取ることができ、/i/の聞き取りに成功すれば候補は自ずと hit に絞られるためと考えられる。

4.4.2 sit

4.4.2.1 学生が書き取った単語

4.4.2.1.1 母音の部分を /イ/ と認識した可能性のある例

sit(3)

4.4.2.1.2 母音の部分を /エ/ と認識した可能性のある例

set(35) セット(4) sed(3) セッド(1)

4.4.2.1.3 その他の例

sad(3)

4.4.2.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /イ/ と認識した者が49人中3人だけいたが、43人は /エ/ と認識したために sit とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

また、/イ/と認識した3人は全員 sit と書き取った。/s/と/t/を聞き取ることができ、/i/の聞き取りに成功すれば候補は自ずと sit に絞られるためと考えられる。

4.5 /ʌ/を含む単語

4.5.1 dull

4.5.1.1 学生が書き取った単語

4.5.1.1.1 母音の部分を /ア/ と認識した可能性のある例

dad(1)

4.5.1.1.2 母音の部分を /オ/ と認識した可能性のある例

doll(13) dool(3) door(3) dog(5) doar(1)
done(7) don(1) dong(1) dond(1) dome(1)

ドール(2) ドーム(1) ドーン(3) ドーク(1)
ドォウ(1) ジョン(1)

4.5.1.1.3 その他の例

無答(3)

4.5.1.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /ア/ と認識した者が49人中1人だけいたが、45人は /オ/ と認識したために dull とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

また、/ア/と認識した1人も dull ではなく dad と書き取っていた。dull という単語に馴染みなかったためと考えられる。

4.5.2 gulf

4.5.2.1 学生が書き取った単語

4.5.2.1.1 母音の部分を /ア/ と認識した可能性のある例

なし

4.5.2.1.2 母音の部分を /オ/ と認識した可能性のある例

golf(20) goes(8) got(1) goth(1) colf(1)
ゴーフ(5) ゴッフ(1) ゴフ(2) ゴッフウ(1)
ゴース(3) ゴースウ(1) ゴウス(1)

4.5.2.1.3 その他の例

無答(4)

4.5.2.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分を /ア/ と認識した者が49人中一人もおらず、45人は /オ/ と認識したために gulf とはかけ離れた単語を書き取った可能性を示している。

4.5.3 multi- (接頭辞)

4.5.3.1 学生が書き取ったつづり

4.5.3.1.1 母音の部分を /ア/ と認識した可能性のある例

manky(1)

4.5.3.1.2 母音の部分を /オ/ と認識した可能性の

ある例

monkey (25) monky (8) morty (2) motive
(1) モウティー (2) モンティ (1) モンキー (6)
モッター (1)

4.5.3.1.3 その他の例

無答 (2)

4.5.3.2 考察

この結果は、耳に入ってきた母音の部分で /ア/ と認識した者が 49 人中 1 人いたが、46 人は /オ/ と認識したために multi- とはかけ離れたつづりを書き取った可能性を示している。

また、/ア/ と認識した 1 人も multi- ではなく manky (英語にはこういうつづりはないが) と書き取っていた。multi- という接頭辞に馴染みなかったためと考えられる。

5. 同じ単語を 2 度聴いて書き取った結果について

上記 4 の 49 人の日本語母語話者の学生のうち、17 人の学生が所属するクラスでは、一連の単語を一通り書き取らせた直後に、同じ単語をもう一度書き取らせた。(4 で報告した結果は、1 回目だけの書き取り結果である。) この結果、1 回目と 2 回目と同一の単語を書き取った学生もいれば、異なる単語を書き取った学生もいた。例えば、ある学生は land の書き取りで 1 回目は lend、2 回目は land と書き取り、また別の学生は 1 回目で land と書き取れたが 2 回目では lend と書き取っていた。前述のとおり、母音はアだと思って聴くとアに聞こえ、エだと思って聴くとエに聞こえることがあるなど聞き手の心理的な側面が影響することを窺わせる事例となっている。

6. 指導上のヒント

これまでに述べてきたことを、英語の教師として

中学生や高校生にどのように伝えたらいいだろう。ここでは「導入」として筆者がこれまでに試みてきたクイズを一つ紹介して本稿を終わることにする。

それは日本語の音素と英語の音素の橋渡しをするための片仮名の活用である。黒板に次の片仮名を書き、「英語にはこのように聞こえる単語があります。すべて基本的な単語です。その単語を当ててください。」と述べる。(母音が続かない子音の部分を小さく書く。)

グループ① ヤッ ヤトッ ラットゥ

グループ② エッ エトッ エッ エン レッ

グループ③ ハトッ ラトッ ウアントゥ

グループ④ ゴドゥ ロッ ボッ フオトゥ

そして次の答えを板書する

① yes yet left

② is it its in live

③ hot lot want

④ good look book foot

そして次の解説をする。

①は /e/ が /ア/ のように聞こえる例である。

②は /i/ が /エ/ のように聞こえる例である。

③は /a/ が /ア/ のように聞こえる例である。

④は /u/ が /オ/ のように聞こえる例である。

このように片仮名を用いることについては議論のあるところであるが、ここでは「~のように聞こえる」という表現を用いており、/e/ = /ア/ と言っているわけではないのであるから、日本語母語話者の生徒に導入として興味関心を引き付ける一つの方法になりうると考える。(母音が続かない子音は片仮名では表現できない。ここでは苦肉の策として小さな字で書き表しているが、教師が実際に発音して見せることが必要である。)

このようにして導入した後は、できるだけ多くの

単語を聴かせて慣れさせることである。そのためには先ず、この目的のために生徒に聴かせる単語を数多く集めることである。それには英語逆引き辞典が便利に使える。例えば /e/ の音を含む単語を探したいときに、つづりが et や ed で終わる単音節の単語を見ていくと、bet, get, jet, set, wet, yet, bed, red, breadなどを容易に見付けることができる。次にこれらの単語の /e/ の部分を日本人には聴き取りが難しい /ア/ のように聞こえる発音をする英語母語話者の発音素材を収集する必要がある。筆者が今回用いたのは電子辞書の音声であったが、2台の電子辞書を比べてより /ア/ に近く聞こえる方を採用した。他の母音についても同様である。

7. まとめ

私たち英語の学習者にとって、英語の母音の音素に含まれている異音にはかなりの幅があると感じられるところであり、それが日本語の /エ/ と /ア/ にまたがるなど複数の日本語の母音にまたがっている事例があることを知ることは、聴き取りを少しでも成功させることに寄与するのであり、英語の教師はこのことを授業の中で意図的に生徒に紹介し、実例に基づいて慣れさせていくことが大切である。

なお、上記4及び5で学生に聴かせた音源は紙上に表現することができず、著作権の関係でインターネットを介して音声で公開することもできないが、英語母語話者の話す英語の発音はニュース報道等の中からいくらかでも入手できるので、様々な発音を収集してみるのも良い試みであろう。

本稿では英語母語話者が話す英語について取り扱ったが、国際共通語としての英語として、英語の非母語話者が話す英語では、更に多様な異音が含まれており、聴き取りを一層困難にしている。このこ

とに対処するための方策についても今後の課題としたい。

参考文献

- Cole, R. A. (ed.) (2017). *Perception and Production of Fluent Speech*, NY: Routledge.
- Cruttenden, A. (2014). *Gimson's Pronunciation of English (8th ed.)*, NY: Routledge.
- Fraser, H. (1992). *The Subject of Speech Perception*, London: Macmillan Press Ltd.
- Fry, D. B. (ed.) (1976). *Acoustic Phonetics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, C and Hastings, C. (2017). *Phonetics, Phonology & Pronunciation for the Language Classroom*, London: Palgrave.
- Jones, D. (2011). *Cambridge English Pronouncing Dictionary (18th ed.)*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Lieberman, P and Blumstein, S. E. (1988). *Speech physiology, speech perception, and acoustic phonetics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 益子幸江 (2011). 「日本語の母音の音色とフォルマントについての一研究」『東京外国語大学論集』第82号.
- 中森誉之 (2016). 『外国語音声の認知メカニズム 聴覚・視覚・触覚からの信号』東京：開拓社.
- Pisoni, D, B and Remez, R. E. (ed.) (2005). *The handbook of Speech Perception*, MA: Blackwell.
- Roach, P. J. (1991). *English Phonetics and Phonology (2nd ed.)*, Cambridge: Cambridge University Press.
- シャープ株式会社. (2015). 電子辞書 Brain PW-NA1.
- シャープ株式会社. (2009). 電子辞書 Papyrus PW-AM700.
- シャイブナー, カート. (2006). 『英語の似た音聞き分けパズル』東京：アルク.
- 鷺見由理 (2011). 『英語の発音が正しくなる本』東京：ナツメ社.
- Stevens, K. N. (1998). *Acoustic Phonetics*, MA: Massachusetts Institute of Technology.
- 竹内真生子 (2012). 『日本人のための英語発音完全教本』東京：アスク出版.